

書評：杉田真衣著

『高卒女性の12年』

—不安定な労働、ゆるやかなつながり—

北九州市立大学 高山智樹

1. はじめに

—「若年女性の貧困」をめぐって

1990年代から2000年代にかけて、若年層の雇用不安定化への社会的関心が大きく高まり、その関心はさらに雇用問題にとどまらない生活の全場面における若年層の貧困問題にまで広がっていったが、その一方で、若年女性の貧困問題はさしたる注目を集めておらず、ジャーナリズムでもアカデミズムでも中心的な話題にはなっていなかった。非正規雇用の大半を女性が占めておりその割合が年々高まっていること、またその中の少なくない部分が若年女性からなっていること自体は比較的早期から認識されていたにもかかわらず、「若年女性の貧困」が正面から論じられることはほとんどなかったのである。

そうした状況を大きく変えるきっかけとなったのが、2014年1月のNHKクローズアップ現代での、特集『明日が見えない～深刻化する“若年女性”の貧困』の放映であった。この番組は広い関心を集め、続く4月に放映されたNHKスペシャル『調査報告 女性たちの貧困～“新たな連鎖”の衝撃～』とあわせて12月には書籍化もされ、「若年女性の貧困」問題を「社会問題」化することに大きく貢献した。さらには、こうした流れと機を逸にするように、2014年には鈴木大介『最貧困女子』（幻冬舎新書）など、女性と貧困、とりわけ若年女性と貧困をテーマにした書籍も数多く出版され、「貧困女子」なる言葉も一般化した。アカデミズムの側からも、2015年には「(若年)女性の貧困」を正面から扱った研究書(小杉礼子・宮本みち子 編『下層化する女性たち—労働と家庭からの排除と貧困』勁草書房など)が出版され、若年女性がどのようなメカニズムによって貧困に陥るのが詳細に明らかにされてきている。

やはり2015年に出版された杉田真衣の『高卒女性の12年』も、さしあたりは以上のような流れの中に位置付けることができよう。もっとも杉田自身は、「社会問題」化されるはるか以前から、「ノンエリート女性」の問題を中心的な課題として研究を積み重ねてきており、本書はその到達点ともいべき著作である。そして実際本書は、そうした杉田ならではの独自のアプローチから、「若年女性の貧困」問題に対して、これまでになかったような視点を提供するものとなっている。

2. 関係のなかに生きる女性たち

本書は二部構成からなっており、第一部「高卒後、一二年の軌跡」では、長期にわたるインタビュー調査の記録にもとづいて再構成された4人の「ノンエリート若年女性」のライフコースが詳細に描き出され、第二部「労働、生活、ネットワーク」では、その記述にもとづいた杉田の考察が展開されている。全体を通じての問題意識は、「ノンエリート女性に焦点を絞り、学校卒業後、彼女たちがどのような労働に従事し、どういった人間関係を形成し、どのように生活しているのかを検討していく」[p.10]というものである。杉田も指摘している通り、「ノンエリートの女性が経験している労働や生活の実態を彼女たちが生きている世界に即して明らかにする研究の蓄積は発展途上にある」[pp.17-18]というのが実情であり、本書が行っているような規模での若年女性の生活世界全体の再構成という課題に取り組んでいるような調査研究はおそらく他には存在しない。この点に、本書の最大の価値があることは間違いないだろう。

そうした、「ノンエリート女性」の生活世界の再構成から見えてくるのは、まずもって、彼女たちが「埋め込まれている関係、自らつくりだす関

係」[p.22]のあり様である。そもそも対象となっている四人の女性たちが、常になんらかの形で相互に関わりを持っているのだが、ライフヒストリーの記述のなかでは、そうした交友関係にとどまらない、彼女たちを取り巻く様々な人間関係に繰り返し言及がなされている。「貧困女子」をめぐる多くの言説において、当事者たちの社会関係からの断絶や孤立が過剰なまでに強調されることを考えれば、杉田のような強調点の置き方自体が、非常に重要なものであることがわかるだろう。

もちろんそれは、杉田の著作に登場する「ノンエリート女性」たちの営む関係が豊かであるということの意味しない。彼女たちが足を踏み入れる職場環境の多くはひどく劣悪であり、そこで彼女たちはしばしば心身を蝕まれるようなハラスメントの被害者となる。ローカルなネットワークはそれなりに強固であるが、そのネットワークを越えた関係にアクセスできるような回路は極めて少なく、しかもそのネットワークに埋め込まれた家族関係は、時に彼女たちの可能性を閉ざし、自由を制限するようなものにもなりうる。そして、恋愛もたいていの場合、彼女たちのそうした困難な状況を打開する突破口にはなりえない。

しかしそれでもなお、彼女たちは目の前の問題を一つ一つ解決していくためになんらかの人間関係に頼らなくてはならず、またそうしたなかで新たな関係が作られることもある。彼女たちを取り巻く社会関係は、彼女たちの抱える困難の原因であると同時に、そうした困難のなかで「なんとかやっていく」ための貴重な資源でもあるのだ。杉田が「若者たちが作りだしている社会関係が、それだけに依拠して安寧に生活していけるだけの頑強なものではないという限界と、経済的にも社会的にも厳しい状況に置かれた現在の若者たちが、それでもなんとか生き抜いていくための表出的かつ道具的な資源にもなっている可能性の両者」[p.21]に目を向けなくてはならないと述べているのは、そういうことである。

そうした杉田の態度によって浮き彫りにされるのは、きわめて限定的な環境の中において、それでもなお限られた資源を利用して自らの生を組み立てていこうとする彼女たちの主体性である。彼女たちは決して、環境に一方的に規定されるだけ

の存在ではない。杉田自身そのことを、ポール・ウィリスに依拠しながら、「社会」はまずもって「ノンエリート女性」に対する「制約」として立ち現れるが、しかし同時に彼女たちは独自の「洞察」によって、所与の社会関係を組み替えていくのだと述べている。実際、杉田が「ノンエリート女性」たちのライフコースの描写を通じて強調しているのは、彼女たちが過酷な経験を経ていくなかで、自身にかかる生活の負担をできるだけ軽減しようとする様、すなわち出来る限り「よまし」な生き方を模索していくその営みなのである。

「若年女性の貧困」が語られる際、この点はしばしば見過ごされがちである。若年女性が貧困に追い込まれる構造的な仕組みを解明しようとするアカデミックな研究においては、いまだ女性たちは受動的に規定される存在として描かれており、構造のなかで自らを変化させつつ構造自体にもはたらきかけていく彼女たちの姿にまでは目が届いてない。また、本来女性たちのそうした姿を描き出す可能性を持っている筈の、ジャーナリスティックな一連の作品においても、過酷な環境の犠牲者という側面ばかりが強調され、その環境のなかで彼女たちが「なんとかやっていく」ための試行錯誤にはあまり目が向けられていないのである。

こうした違いを象徴的に示しているのが、「性サービス産業」の扱いであろう。仁藤夢乃の著作『女子高生の裏社会』（光文社新書）が象徴的であるが、既存の「若年女性の貧困」を扱ったルポルタージュ作品の多くは、「性サービス産業」を語る際、それが女性たちを一方的に搾取する「あってはならない労働」だという規範的な判断を前提にしがちである。それに対して杉田は、「性サービス産業」の問題点を逐一列挙して、そのリスクの高さを確認しながらも、「性サービス産業」が「ノンエリート女性」のライフコースに半ば必然的に入り込んでくること、女性たちがそこでの就労経験を参照しつつ、「性サービス産業」とのそれぞれの距離を取りながら、彼女たちなりの「生活の輪郭」[p.188]を作り上げていることを描き出そうとする。「性サービス産業」で働いた経験を持つ一人の女性が経営側にまわり、そこで労働者である他の女性たちとの関わりの中からは、自分なりの仕事の「やりがい」を見出していくという本

書で紹介される事例などは、現代の「ノンエリート女性」にとって、「性サービス産業」もまた生活世界に埋め込まれた「関係」の一つであり、さらにはその「関係」ですら、彼女たちが主体を確立していくための「資源」にもなりうるという、杉田の複眼的な理解をよく示す一例と言える。

3. 「ノンエリート女性」たちの見る風景

上述したような本書の特徴が生まれてくるのは、おそらく著者の杉田が、できる限り当事者に寄り添い、彼女たちの視点から社会を眺めようとしているためである。それは、調査者（研究者）が、何らかの枠組みを前提として、それをもとに「ノンエリート女性」の社会を分析するのではなく、既存の枠組みはなるべく脇に置いて、あくまで彼女たちが見ている風景を忠実に再現しようとするのだと言い換えてもよい。そうした姿勢は、本書のライフヒストリーが、当の女性たちの言葉に即して構成されており、記述の間に著者によるコメントがほぼ全く挟まれていないことにもうかがえる。

また、第二部での考察にも、そうした姿勢は反映されている。例えば、高校在籍時からアルバイトをしており、卒業しても正規職につける見込みの低い「ノンエリート女性」にとって、そもそも「学校から仕事へ」という「移行」論の想定自体が当てはまらないという指摘などは、当事者の視点にたつてこそ得られる洞察と言えるだろう。また第二部では、先にも触れた「性サービス産業」の考察に大きく紙幅が割かれているが、それはおそらく、望むと望まざるとにかかわらず、彼女たちの見ている風景の中にはどうしてもそうした仕事が入り込んできてしまうのであって、それを頭ごなしに否定してしまえば、彼女たちが生きる生活世界のリアリティが失われてしまうと杉田が考えたためではないだろうか。

「若年女性の貧困」についてなんらかの対策が必要なことは疑うべくもないが、その際、彼女たちの目線にたったときに見える風景に対して謙虚にならない限り、いかなる方策も有効たりえないだろう。私たちがなすべきは、自分自身が持つ限定的な視野の中に対象となる彼女たちを無理

やり押し込もうとすることではない。そうではなく、私たち自身がどうすれば彼女たちの見る風景の中に入っていき、その中で何ができるのかを考えるべきなのである。そしてそのために、本書はきわめて重要な手掛かりを与えてくれる筈なのだ。